

<b>Title</b>	李公麟-北宋文人画の巨擘-の家系と行跡について
<b>Author</b>	西野, 貞治
<b>Citation</b>	人文研究. 25 卷 1 号, p.92-101.
<b>Issue Date</b>	1973
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	故西垣雄太郎教授追悼号

Placed on: Osaka City University Repository

## 李公麟—北宋文人画の巨擘—の 家系と行跡について

西 野 貞 治

北宋には、後世文人画とよばれる、画の専門家でない知識人層による絵画が流行し、画史に名を残す幾多の名家を輩出した。中でも李公麟は、前代の諸大家を学んで、ひそかに彼等の長所を集合し、白描・鉄線などに独特の創意をこらしてなした画風は、南宋の画界に多くの追随者を出した。その作品は、『宣和画譜』記載の御府の所蔵でも107点を算え、歴代の著録を検すると、更に多くの名品があったことが知られ、北宋第一の文人画家と定めて異論はなからう。

いま、この李公麟の伝は、『宋史』や『東都事略』に、また『宣和畫譜』・『畫繼』・『圖繪寶鑑』などに、かなり詳細に亘って述べられているが、その家系・行跡については模糊たる部分が多い。私は公麟と同時代に生き、かなり親密な交をもっていた蘇軾・黄庭堅らの周辺をさぐるうちに、いまだ知られぬ二、三の事実に気づいて小稿をものした。博雅の一粟に供したい。

李公麟(字は伯時)の本貫は、元来舒城であるのを、王明清の『揮麈録』はこれを舒州と誤まり、宋史もそれを襲って、正史なるが故にそれが正しいとされて来た。北宋の舒州は安慶府に属し、廬州府舒城縣と境は接するものの全く別地である。舒城縣には、縣南三十里の春秋山に李公麟の讀書堂や、彼が硯を濯ぎ、以後池水が黒くなったと言われる洗硯池など多くの遺跡があることを南宋王象之の『輿地紀勝』が記載している。さらに、元代には、舒城縣の東禅寺の東、舒王祠の西、かつて寺有となっていた土地に、李公麟龍眠山莊の故基が発見されている。

公麟はのちに龍眠居士と号したが、その号とした龍眠山は、この山莊に面し、縣の西南八十里の春秋村にあった。この山名は臥龍の如き形からきたのであるが、一に龍舒山とも称せられる。安慶府桐城縣西北二十里にある龍眠山は、この山と同名ながら異なる山である。李公麟を舒州の人と誤ったの

は、この山名から起ったことである。さらに公麟の秘蔵の玉十六顆のうち鹿盧環を従葬した<sup>IE3</sup>という彼の墓が、縣南五里にあることによっても、舒城を彼の本貫とすることは動かし難い。

李公麟を南唐先主李昇の諸孫つまり従孫とするのは、蘇軾詩の註者施元之<sup>IE4</sup>である。施元之は乾道中秘書省著作郎や国史院編修官を歴任しているから、前代の夥しい史料を閲しているから、この説が正しかろう。『揮麈録』に公麟らのことを述べて、「納以先貴，母相忘其後」というのは、彼が王族の血をひくことをにおわせる。『畫繼』の著者鄧椿は、彼を舒城の大族とし、その家は代々儒を業としたと言うのは、事実を蔽うものである。鄧椿は、父虚一が賢良方正科にあげられ、大理寺丞に任ぜられたというが、南唐李氏との関係はこれ以上は詳らになし得ない。しかし南唐李氏の一族なればこそ、法書・名画の豊富な儲蔵があり、公麟は少時より日々書画に接するを得て、文学・芸術にすぐれる李氏の血を引いた天賦の才能をのぼし得たのである。父の代からの邸は、東京開封府外城、宋門外の紅橋子<sup>IE5</sup>にあったと思われる。

彼の生年は、彼の画に書いた米芾の記記と署款<sup>IE6</sup>からは、皇祐元年と推定し得るが、これがいささか疑わしいので、恐らくはこの前数年間のことであろう。公麟には、公権・公寅（字亮工）の二人の弟があつて、いずれも進士にあげられ、<sup>IE7</sup>当時に有名であつた<sup>IE7</sup>というが、公権については、何も知られない。また公麟には碩<sup>IE8</sup>という名の男子があつたことと娘が趙升叔に嫁していたこと<sup>IE9</sup>だけが知られる。

鄧椿は、李公麟を熙寧三年の進士とし、稍後の郎暉も同じ説をなしている。<sup>IE10</sup>しかるに張耒の張右史文集に附載される『同文唱和集』の公麟らの詩題によって、公麟は鄧忠臣<sup>IE11</sup>と同年の友であることが知られる。陸心源は忠臣を二年の進士とするから、一年の齟齬を来たす。ただこの時期の歴史にも精通していた厲鶚が、忠臣を熙寧三年の進士<sup>IE12</sup>としているので、いまは鄧椿の説に従おう。そして、この熙寧三年の進士合格者は上官均・葉祖洽・陸佃・蔡京・蔡大ら289人で、考試を監した蘇軾・宋敏求らが上官均を一等、葉祖洽を二等、陸佃を五等に定めたが、呂惠卿の動きで親策<sup>IE13</sup>によって一、二の順序は逆転して、用事者に投合する葉祖洽が状元となっている。

公麟は鄧椿も言う如く、文学を以って当時に有名であつた。『東都事略』も『宋史』も、彼を黄庭堅・秦觀・張耒らに並べて文苑伝・文芸伝に置いて、『東都事略』は「其為文清婉，工於詩，而一時多所称譽焉」と述べているが、彼に文集があつたか否かも知られない。『同文唱和集』は公麟の五

言律詩十首、七言律詩四首、七言絶句一首、七言排律一首がおさめられていて、公麟の世に知られる作はこの外に『宋詩記事』採録の『声画集』の一首と『事文類聚』の一首のみではないかと思われる。ただこの『同文唱和集』が宋以後の人の編輯にかかる、出処の明らかでないものだけに、真に公麟の作であるか否かは更に考査をまたねばならぬ。画と文学とを、同一人で兼ねそなえていたことは北宋文人の通例で、文学に深いものこそすぐれた画を作し得るというのが、当時の芸術観であったのである。公麟は博学で奇字に通じ、古器を考定したことで知られるが、『宋史』「芸文志」によるとその著に紹聖の頃完成したと思われる『古器圖』一卷があった。

公麟は熙寧三年に登第し、元符三年に致仕したと鄧椿は言い、従仕三十年と『宣和畫譜』は言うから、登第以後官を離れたことがないわけである。『宋史』は、南康長垣尉・泗州録事参軍を経たというが、その時期は明らかではない。『宣和畫譜』は、京師に居ること十年というから、恐らくは元豊の末か元祐のはじめ、中書舎人の地位にいた年友陸佃の推薦によって、中書門下後省刪定官となった。御史董敦逸に辟されて御史検法官となったのは、董敦逸が監察御史の任にもいたのは紹聖元年9月から4年12月までであるので、この間のことである。その後元符中、無為州司戸参軍として地方に出たが、元符3年朝奉郎を以って致仕している。

公麟は中央・地方に在仕の間に、休沐を利用しては名人勝士を訪ねて交をなしたが、元豊末年鍾山に隠棲する王安石を過って従遊し、去るに及んで四詩をもって送られ、すこぶる称賞せられたと『宣和畫譜』は言う。周必大も、王安石がつねに彼を重んじ、しばしば詩を贈ったと『題李龍眠山庄圖』に言う。しかるに、いまその詩を王安石の文集に検して、見出し得ないのは如何なることであろうか。それは公麟に叔字という字もあったことが、今は知られていぬからである。施元之は蘇軾の詩の註注17にそのことを明言している。いま李叔時について詠んだ詩を検すると、『臨川先生文集』巻26に次の五言絶句が見える。

題定林壁懷李叔時

雲與淵明出 風隨禦寇還 燎爐無伏火 蕙帳冷空山

これは蔣山の定林庵（安石の読書の所）の壁に題した、公麟が去った後の心の空虚を詠じたものである。そして巻29の次の七言絶句二首は、時叔と題

しているが目録では叔時と作っていて、公麟に贈られたものと考えられる。

示李時叔二首

知子鳴絃意在山 一官聊復戲人間 能爲白下東南尉 黎杖緇巾得  
往還

二

千山訪我幾摧翰 清坐来看十日留 勢利白頭何足道 古人傾蓋有  
綢繆

一首は、白下の東南尉<sup>JE18</sup>に赴任する公麟が、常に山林を忘れず、中隱の境地で従仕することを知音として称え、あとの一首は、遠路訪問の労をねぎらい、忘形の友として公麟を遇することを詠む。更に卷24の七言律詩「送李秘校南歸」も、公麟を送るものである。これで送る時に作られた詩四首が明らかにされたことになる。

公麟の作で、「宣和畫譜」や「眞蹟日録」などに見える「王安石定林蕭散圖」は、構図は知り得ないけれども、定林庵に於ける安石の隱棲の一時をえがいたものであろう。また彼の「王荊公遊鍾山圖」について言えば、金陵退居後の安石は、鍾山に遊ぶのに、つねに一人の者に経を抱かしめ、一人の僕に当時編纂中の『字説』を抱かせ、前導の一人には虎子を負わして、従はしめたことを畫いたものであるが、公麟は同年の陸佃を訪れた時に、興にかられてその図を作り、松下に立つ進士楊驥・僧法秀をも画いたものである。また彼の「荊公騎驢圖」<sup>JE21</sup>は、登場人物を異にするが、そのモチーフは全く同じである。公麟と安石の交友は、ある短かい期間であったが、王安石の肖像を昭文齋の壁にえがくなど、かなり密なものがあったから右の二図も、安石の隱棲地での勝事に深く共鳴し傾倒する所があって画かれたものである。

李公麟は黄庭堅とは早くから相知の間柄にあった。元豊3年、舒州三祖山谷寺を訪ねた黄庭堅は、その寺の西北にあたる石牛洞に遊び、庭堅が石牛上に坐したのを公麟が画き、これによって庭堅は以後山谷道人と号することになった。<sup>JE23</sup>

公麟と庭堅との交の早かったことを明らかにする為、李燾（字德素）のことを述べねばならない。李燾は舒城の人、俗世に浮沈しながらも、古人のごとくその操行は高潔であったが、元祐2年には龍眠山に隱棲している。庭堅<sup>JE24</sup>

との交ははやくからあったようで、のち庭堅の娘の睦は稔の子去華（字文伯）に嫁しているが、もともと黄・李両氏は我が国で言う所の回縁の關係にあったと考える。周必大は、李稔を公麟の弟とし、先主李昇の四世の孫で、並に科第に登り、舒城の龍眠山に隱棲したという。これによれば、公麟は李昇四世の孫になるわけである。ただ李稔を公麟の弟とするのは正しくない。近い親族であったから、黄庭堅は元豊より以前に李稔を介して公麟と相知の關係になり得たわけである。

この外に公麟と親族ではないが、公麟と親しい人物に李冲元（字元中）がいて、志行人物ともにすぐれ、山沢の遊をなしたので、公麟・稔と並んで龍眠三友と号されたが、この冲元も庭堅と早くより交があり、庭堅の集中に「招隱寄李元中」「龍眠操三首寄元中」など冲元の山林の生活を賛して、追従して隱棲したい旨を詠んだ詩歌がある。この二篇は庭堅が吉州大和縣在任の元豊4年の作で、冲元はその後元祐3年登第して、宜春決曹掾となる。いま公麟との間柄を示す陸佃の詩二首を示そう。

依韻和李元中兼寄李伯時二首

龍眠三李晦聲塵	長望淮壖與海濱
自古市朝成底事	卽今猿鶴伴他人
細思南陌東阡月	大勝千門萬戶春
可惜欲歸歸未得	不知家釀爲誰醇

五丈河邊避俗塵	閉門情味似漳濱
拋離鵲渚今三歲	成就華嚴祇兩人
貧裏有時求得王	老來無可奈何春
平生共學王丞相	更覺苟揚未盡醇

一首は龍眠の三李は声名を匿して、都にあって望郷の念のさがたく、市朝の榮華を無用のものと観て、故郷の山野の生活を志向しながら、直ちに歸休にふみきれぬことを歎く。

二首目は、東京城東五丈河のあたり俗塵をさげ門を閉した清潔な生活に、舒城を離れて3年、二人は「華嚴經相」の完成にうちこみ、春を忘れて華嚴王を求めるが、王導の稱したごとく孟子の仁義を醇なるものとして、定省に欠けざることをすすめたものである。

公麟は草書を善くしたことを以て知られ<sup>if 30</sup>、後に多く見られる贋作は、その落款を見れば判別できるといわれたが、<sup>if 31</sup>沖元も小楷を以て当時有名であり、公麟の作にしばしば沖元が讚を附することがあった。この陸佃の詩には、彼の原註「伯時畫華嚴，元中寫」とあって、公麟の画に、沖元が小楷で『華嚴經』の經文を写したことがわかる。いま新訳の『八十華嚴經』についてみると、それは39品で、七処七会を説く。それを構図した「華嚴經相」の画卷は厩大で、この完成にかなりの期間を要したと思われ、これを合作した沖元と公麟の契合のほどが察せられる。公麟が首都に上ったのを元祐元年とすれば、この華嚴相にとりくんだのは元祐3年であろう。上京のはじめは、公麟は馬を画くことに心血をそそぎ、大僕少卿であった曹輔を訪れては国馬を縦観して、<sup>if 32</sup>その姿態を印象に収めて、数々の名作を出したが、一旦法雲秀老の勧めで仏画に転向した<sup>if 33</sup>のは元祐3年ごろと思う。秀老は元祐5年8月示寂しているからである。元祐4年のころ、公麟はかねてから帰休の計をなして経営していた王維の輞川山莊にも比する舒城の山莊を自ら画いて、<sup>if 34</sup>数年前から親しくしていた蘇軾に詩を乞うたところ、軾は自らは記を書き、弟轍に詩二十首を作らせているが、<sup>if 35</sup>その記の中で嘗て公麟の華嚴相を画くのを見た<sup>if 36</sup>と述べているのは、まさに右の推定をうらづけ得よう。

陸佃の詩にも見える龍眠三李は、王明清によると公麟・公寅・沖元であるとして、<sup>if 36</sup>周氏のあげた三友のうち、渠を除いている。公寅は兄と同様早くより帰休の計があり、隱居所飛霞亭をしつらえていて、かつて一度そこに引退したようで、かねてより公麟にその図を依頼していたが、それが果されたのは公麟が元符3年致仕した後である。公寅は詩文を以て薦紳の間に鳴り、蘇軾・黄庭堅とも交友があったので、儋州から北帰の途中の蘇軾は「李伯時畫其弟亮功舊隱宅圖」と題する詩を作った。黄庭堅は蘇軾の歿後、崇寧二年この詩に和して「題和東坡題李亮功歸來圖」<sup>if 37</sup>を詠んだが、「題李亮功家周昉畫美人圖」「題李亮功戴嵩牛圖」<sup>if 38</sup>の詩も同時の作である。王銍によれば、長沙の官に在任中の李寅を宜州の貶所に赴く庭堅が過ぎり、周昉の画を見て嘆賞して詠んだのが右の詩で、<sup>if 39</sup>周昉・戴嵩など儲蔵中の名品を同時に披露されたのである。

公麟と蘇軾の交は、元祐元年正月、上京して間もない公麟は、宣徳郎、つまり宋代の文官の正七品下の地位にいた時、礼部郎中の蘇軾と蘇軾の姻籍にあたる柳仲遠の請で「翠石古木圖」を描いたのがはじめである。この時、蘇軾は蒼々たる石を、公麟は長松をうけもち、杜甫の「戲爲韋僊雙松圖歌」の一

句「松根胡僧憩寂寞」の意を書いて、「憩寂圖」を作り、蘇軾の弟の轍がこれを詩に詠み、軾が次韻している。公麟と蘇軾の間が最も密になるのは、元祐三年二月蘇軾は貢挙の事を領し、公麟は辟されて考校官となった時で、詩院中で他の考校官と唱和し、或は公麟の齋舎で鬼仙の詩を作るなどして以降、蘇軾や蘇轍はしきりに公麟の画図を詩に詠んでいる。

このことは周知の事実でこれに止めるが、蘇軾との関係で数百年來諸家の話題となった、公麟の「西園雅集圖」<sup>注40</sup>について、いささか述べよう。これは駙馬都尉王詵が、蘇軾ら15人の名士を己が庭園に招いて燕遊したものを公麟が図に描き、米芾がその跋を書いたもので、米芾の跋文は、いま彼の文集『寶晉英光集』の補遺に収められている。その來客は、蘇軾兄弟と、蘇門四学士といわれた黃庭堅・秦觀・張耒・晁補之、それに李之儀・蔡肇・鄭嘉會・米芾・劉涇・王欽臣・僧法秀・道士陳景元と公麟で、陳景元を除けばみな蘇軾と親しい人である。公麟の真蹟はすでになく、模写か、更にその模写が幾本か残っているが、蘇詩の註家王文誥<sup>注41</sup>は、この雅集を元祐2、3兩年の間にあると見て、劉涇は莫州の倅に赴かんとするのでこれを二年の間に置くべきであると簡単に定めている。私は画題となった西園の雅集が、果して実際に行われたか考えたい。まず先人の、この雅集について述べるものに樓鑰がある。彼は王詵の風流を勝れたものとし、その図を秦觀の詞「千秋歲や」・「題務中壁」詩の一句をとり出して、雅集のあったことの証拠としようとする。劉克莊は宋朝外戚の李端愿、王詵が、文を好み士を喜んだことを称し、彼の見た図は彩色で、人物の小さいものは微少であるが、えがかれた人物は天下の士であること、雅集を烏台詩案以前にありとする如き旨を言う。樓氏は、図の内容に触れず、彼の引いた二句をもって燕集の事実は証し得るものではない。劉氏は李端愿をも称するが、或はこの人達を描いた「雅州図」が別に存したのやも知れないが、雅集の時期を元祐より前には見るを得ない。しかるに明の詹景鳳の見た図は团扇の一面には第園人物を、一面には米芾の「雅集序」を書いているもので、天下無雙のものと言うが、これを公麟と米芾の真蹟であるとは言明していない。そして明末の陳繼儒は、この図に二種あって、一は元豊の間王詵の第で、一は元祐の初趙令時の邸で行われたもので、彼が見た所には明人仇英の模写もあると言う。「雅集圖」の伝来は以上の如く、甚だ複雑な問題を含んでいるが、この登場人物の詩文集を検して、この雅集の存在を裏付け得る一句をも検出し得ない。蘇軾は「六客詞」・「後六客詞」にも見られるように、こういう雅集は、その時か、後に必

ずふれているの  
られる王詵は、  
れており、その  
詩を要するも  
祐文人の風流と  
また蘇軾は元  
蘇氏の兩院の子  
清情のことを異  
の推薦をうけか  
ら出た語である  
符の官界に留ま  
は公麟の家計  
手にあるのを  
意な従仕であ  
れを得る為に  
であった。元  
貫くためとは  
う。  
注1 李公麟  
評説あり  
注2 樓鑰  
の李端時  
注3 『復齋  
注4 『次韻  
注5 『復齋  
書卷5、  
注6 『石渠  
り、米  
注7 『大輿  
注8 『復齋  
注9 『山  
跋を引  
注10 『經



ずふれているのに、このことは尤も不思議である。この雅集を催したと伝えられる王誥は、<sup>注46</sup> 書画の收藏について品格を欠くことを蘇軾から痛烈な評をされておられ、その跋を書いた米芾は狡猾を以て知られる人である。ただ更に検討を要する。もし作為によるものなら、かかる伝説を生んだのは、蘇軾ら元祐文人の風流と公麟の名声のなせる所である。

また蘇軾ら元祐の文人が南方に左遷されて以後、公麟は京師で官にあり、蘇氏の兩院の子弟に途で遇えば、扇を以て面を障い、一揖だにしなかった、薄情のことを晁説之は述べた<sup>注47</sup> というが、元祐末蘇軾の弾劾につとめた董敦逸の推薦をうけた公麟に、蘇軾門下の晁説之が不満の気持を抱いていたことから出た語である。かつての交友を裏切って、その反対派の主導する紹聖・元符の官界に留まったことは、公麟の晩節を汚したかに見える。既に元祐末には公麟の家計は、かつての如く豊かではなく、父虚一の收藏した画が王誥の手にあるのを知りながら、高価のため買戻し得ぬ不如意な状態からした<sup>注48</sup> 不本意な従仕であった。これは蘇軾も言う如く、<sup>注49</sup> 古玉器に特別の執着をもち、それを得る為には全財産を注ぎこんで悔いなし、芸術家らしい放漫な生活の為であった。元符3年50何歳かで故郷の龍眠山荘に帰休したのは、その素志を貫くためとは言え、一部の人士の白眼にたえ得なかったからでないかと思う。

注1 李公麟をふくむ北宋画界の大勢は、中村茂夫『中国畫論の展開』「宋元篇」に詳説がある。

注2 掲侯斯、『掲文安公全集』10、「舒城龍眠書院記」。なお『輿地紀勝』には、蘇軾の李伯時山荘記の碑があったことを載せている。

注3 『復齋漫録』

注4 「次韻子由書李伯時所藏韓幹馬」詩注。

注5 『復齋漫録』、『東京夢華録』はこれを虹橋とするが、紅は虹をあやまるか。同書卷5、「收灯都人出城探春」条に見える。

注6 『石渠寶笈』卷36に記載される公麟の九歌図卷末に、熙寧丁巳の米芾題記があり、「米芾篆書九歌、時年二十七歳、公麟時年二十九」の署款がある。

注7 『大明一統志』卷14。

注8 『復齋漫録』

注9 『山谷全書』別集卷8、「書伯時陽関図草後」。黄芑も、年譜崇寧元年5月条にこの跋を引く。

注10 『経進東坡文集略』卷59、李端叔真贊注。

- 注11 『宋史翼』卷26。
- 注12 『宋詩紀事』卷25、厲鶚はこの書に『同文唱和集』の詩を全面的に採録しているが、公麟の小伝では登第の年を記さぬ。これは地志の類に、その年を、元祐とか元符とかするものがあるので慎重を期したのであろう。
- 注13 『續資治通鑑長篇』「拾補」卷7。
- 注14 この書は宋代以降の書目に著録されず、同文館の考試は注から元祐2年以降と考えられる。このころの進士の考試に秋試はない。これは後人が「張右史文集」によって編んだものであろうか。
- 注15 『續資治通鑑』卷84, 85。
- 注16 『嘉慶重修一統志』卷123。
- 注17 注4に同じ。
- 注18 『輿地紀勝』はこの詩を李時叔が上元尉となった時のものとする。輿地紀勝の著者王象之は、施元之より数十年も後の人で、叔時と公麟が同一人物であることを知らなかったようである。
- 注19 中川忠順「龍眠と白描体」では、元豊8年秘書省校書郎に召され、元祐元年首都に上るとするが、『同文唱和集』の詩題から、公麟は元豊2年考試官になっていて、その後地方の属官として赴任するに当って王安石を訪ねた時の詩がこれで、元豊の後半のことであろう。
- 注20 『陶山集』卷11、「書王荊公遊鍾山圖後」
- 注21 『豫章黄先生文集』卷27、「書王荊公騎驢圖」
- 注22 『輿地紀勝』卷17、「建康府古迹」条。
- 注23 『黄山谷詩集』外集卷8、「書石牛溪旁大石上」注引『同安志』
- 注24 黄庭堅「題薛醇老家李西臺書」
- 注25 『豫章黄先生文集』卷21、「祭李德素縣君文」に「人皆願然，有子如此，惟我息女，獲羞蘋藻，夫人慈哀，教訓拊憐，之子于歸，我竄蠻貊，令我不憂」とあり、また『山谷全書』「外集」卷13に、「和李文伯暑時五首」がある。
- 注26 『山谷全書』別集卷五「問李氏親簡」。
- 注27 『益公題跋』卷4、「題鞠城銘」
- 注28 注27に同じ。
- 注29 『陶山集』卷2。
- 注30 『皇宋書錄』中。
- 注31 『後村先生大全集』卷102、「伯時臨韓幹馬」
- 注32 『避暑錄話』卷下。
- 注33 『五燈會元』卷17。
- 注34 「龍眠山莊圖」は「宣和畫譜」にのせられたが、のち明の王行儉の跋のあるもの

が『聽風樓書畫記』卷1にみえる。

注35 『東坡題跋』卷5、「書李伯時山莊圖後」

注36 『揮麈三錄』卷2。

注37 公寅の字亮工は一に亮功に作られる。題和は一本追和に作る。

注38 黄益『山谷先生年譜』卷30。

注39 『聲畫集』卷2、「追和周昉樂阮美人圖詩序」

注40 田中豊藏「西園雅集圖傳」に詳細な考説がある。

注41 『蘇文忠公詩編註集成』卷28。

注42 『攻媿集』卷77、「跋王都尉湘鄉小景」

注43 『後村先生大全集』卷104、「西園雅州圖」

注44 『東園玄覽編』卷1。

注45 『媿古錄』卷1。

注46 『東坡題跋』卷5「北齊校書圖」

注47 『邵氏聞見後錄』卷27。

注48 『米芾畫史』

注49 『經進東坡文集事略』卷59、洗玉池銘。